

2022 年度
博士学位論文
(要約)

「構造的ソーシャルワーク理論を用いたスクールソーシャルワーカーによる
学校と家庭の協力関係を構築するためのプロセスに関する研究」

関西福祉科学大学大学院 社会福祉学研究科
臨床福祉学専攻 荷出 翠
学位記番号 甲第 24 号

近年、不登校やいじめ、非行など子どもを取り巻く多くの問題が取り上げられている。子どもを取り巻く多くの問題は、そもそも一人だけでは起こりえない問題であり、家族システム、学校システムの課題が複雑に絡み合っていることが多く、実際には学校（教員）と家庭（保護者）の連携の重要性が指摘されつつも（浜谷 2006；石隈・上村 2002）、連携の不十分さ（内田・海老瀬 1999）が課題として挙げられている。さらに、これまでの研究で家庭と学校が連携して、家庭と学校の両場面で明らかな効果を示したエビデンスに基づいた介入モデルはほとんど見られない。

本研究の目的は、困難事例を根本から解決していくためのスクールソーシャルワーカー（以下、SSW）の有効な支援のあり方はどのようなものなのか明らかにすることである。困難事例は家庭と学校が対立関係になりやすく、両者をつなぐための具体的な支援方法について検討することである。家庭と学校が対等で対話できる関係によって子どもの問題をどのように解決していくのかといった支援のあり方を明らかにすることを目的とする。

Germain(1992)は、子どもと学校の間の中間面（インターフェイス）に立ち、子ども、家族、コミュニティが社会的力量を高めるのを手助けし、同時にこの三者のニーズと要望に対する学校の応答性を高める援助を行う立場にあるのがソーシャルワーカーであると述べている。学校に配置されるSSWは悪循環を変えるために、①子どもと学校（教師や友だちと）の交互作用、②学校と家庭の間の交互作用、③子どもと保護者との交互作用への介入をおこなうことができるとしている（大塚 2011）。特に学校を拠点として活動するSSWならではの特徴は、子どもと学校、学校と家庭の交互作用に直接的にアプローチできる点であろう。

困難事例において、家庭と学校をつなぎ、学校を変革するためのシステム理論やシステムズ・アプローチ研究を探索して、その到達点と課題を明確化してきた。これらの理論やアプローチでは、問題の根本的な解決には至らず、構造的ソーシャルワーク理論の実践現場での適用について具体的に提示する必要性が見えてきた。すべての子どもが通う学校現場において子どもの問題解決、問題の再発防止を図るには、根本的な社会変革を同時に目指す構造的ソーシャルワーク理論の視点が重要であるといえる。

構造的ソーシャルワーク理論は、個人変革とともに抑圧を全体的に捉えながら社会構造を変えることに重きを置いている。SSWは、学校組織を変革するために個人のパワーのみならず、家庭と学校のパワー関係、権力、不平等を把握し、家族や教師とともに変革を目指す。何が抑圧であるかを家族・教師と一緒に探り、力の不平等を減らすために、対話をおこない対等な関係を構築する。対話による対等な関係を結ぶことによって、SSWと家族、教

師は、構造的抑圧に共に挑戦する活動家になることが考えられる。

しかし、これまでの研究において、家庭と学校、SSWの対等な関係の具体的な築き方について示されてこなかった。

そこで本研究では、スクールソーシャルワーク分野において学校と家庭をどのようにすれば対話的關係に導くことができるかを、インタビュー調査及び事例研究を通して、困難事例を解決するための有効な支援のあり方を明らかにし、スクールソーシャルワークの実践プロセスモデルを示す。

本論文のフローチャート

本論文は序章、第1章から第5章で構成する（図1）。

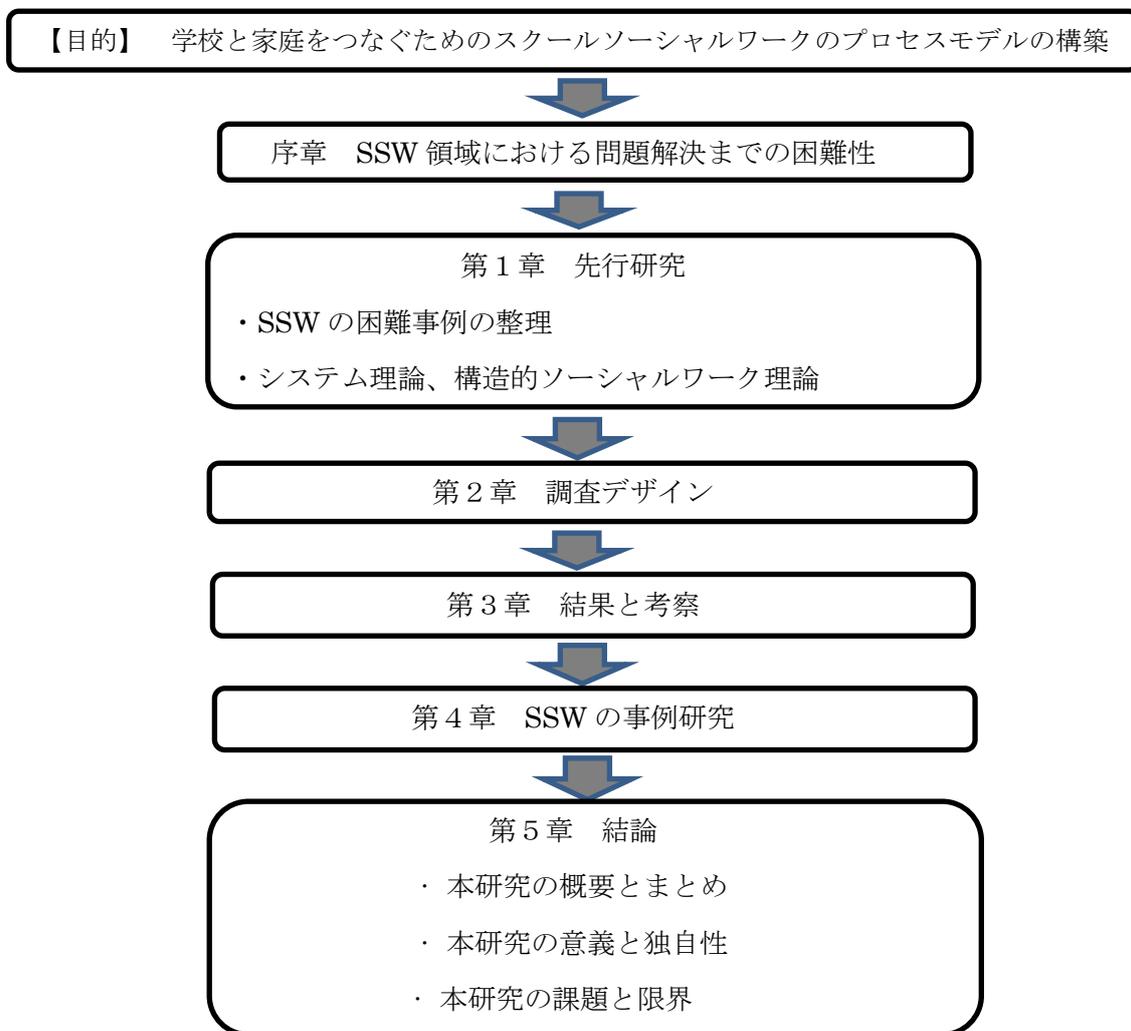


図1 本研究の構成と各章の概要

論文構成（目次）

序章

- 第1節 研究に至る経緯
- 第2節 筆者の問題意識
- 第3節 論文の構成
- 第4節 用語の定義

第1章 先行研究の課題と本研究の目的

- 第1節 ソーシャルワーカーが抱える困難性
 - 1、SSW が抱える困難事例の現状と課題
 - 2、学校と家庭をつなぐことの困難さ
 - 3、ソーシャルワーカーが抱える困難事例の現状と課題
- 第2節 システム理論に関する先行研究
 - 1、ソーシャルワーカーのシステム理論に関する先行研究
 - 2、SSW のシステム理論に関する先行研究
- 第3節 構造的ソーシャルワーク理論に関する先行研究
 - 1、構造的ソーシャルワーク理論の到達点
 - 2、構造的ソーシャルワーク理論における対話
 - 3、構造的ソーシャルワーク理論への批判
- 第4節 研究の目的

第2章 調査デザイン

- 1、調査方法
- 2、調査対象者
- 3、倫理的配慮
- 4、分析方法

第3章 結果と考察

第1節 学校への関わり

第2節 家庭への関わり

第3節 学校と家庭への関わり

第4節 まとめ

第4章 スクールソーシャルワークの事例研究

1、不登校 A さんの事例

2、暴力行為のある B さんの事例

第5章 結論

第1節 研究（各章）の概要

第2節 本研究で得られた知見とその意義

第3節 学校と家庭をつなぐ SSW の支援のあり方への提言

第4節 本研究の限界と今後の研究課題

各章の要約

序章では、研究に至る経緯、筆者の問題意識、論文の構成を示した。

第1章では、困難事例について、先行研究を整理した。困難ケースとはどのようなケースを指すのであるか、困難とされる事例への対応について現在まで明らかになっていることについて、米英を含む困難事例の歴史的背景を概観しながら、困難事例に関する研究を整理した。

困難事例においては、家族内部の関係だけでなく、家族外部の関係によって困難な事例に発展しているということがわかった。家族外部の関係として一日のほとんどを学校で過ごす子どもたちにとって学校が大きな存在となる。その学校と家族の関係について、実際には学校（教師）と家庭（保護者）の連携の重要性が指摘されつつも、実際にはそれが困難な状況がある。その理由として、教師が保護者を「指導する」という立場や、荒れた学校を経験している保護者自身の学校や教師へのマイナスイメージ、さらには教師の学校における人間関係など、問題を学校組織全体で共有し解決する手法が十分に定着しているとはいえない状況等である。また、教師と親の間に文化のずれの違いによって、教師は親との価値観の違いをなかなか克服できないでいるといった点が明らかになった。

しかしながら、家庭や学校の関係構築のための支援については、未だ発展途上の段階にあり、具体的なアプローチ方法などについての研究が求められているといえよう。

一方で、学校と家庭が連携し協力するためには第三者的な存在の重要性（岸田 2009：瀬戸 2013）が指摘されている。しかし、その第三者的な役割がどのように働きかけを行ない、つないでいくかについて具体的に述べられた論文は見当たらない。学校における第三者的な役割とされる SSW は子どもと保護者との関係性や SSW 自身と保護者との関係性に着目し、その対応に困難さを感じている。また、過度な被害的発言がある保護者への対応に強く困っているという結果が見られるなど、（学校と家庭をつなぐ以前に）家庭への対応に困難を抱える SSW が少なくないことが分かった。

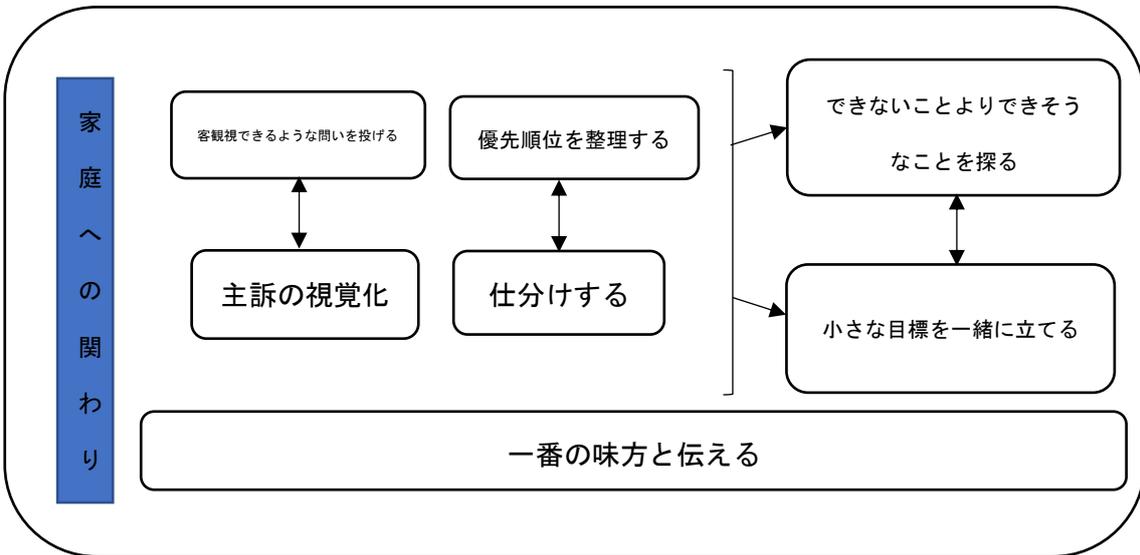
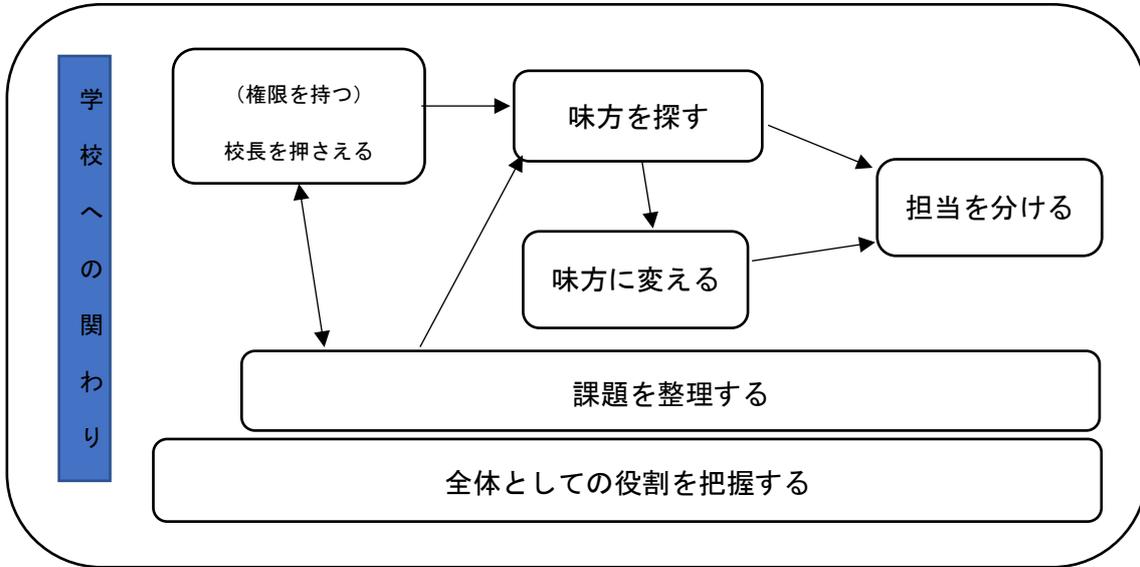
第1章の第2節においては、問題を抱える家庭にとって迅速な変化をもたらし、有効であるとされるシステム理論を基盤とした家族システム理論、システムズ・アプローチについて整理した。これらの理論・アプローチは物の見方であるから、概念化されたものが少なく、成果を示す研究がほとんどなされていないことが明らかになった。さらに、問題の根本の解決に至らないことが見えてきた。

協働するためには、教員同士や学校と家庭だけでなく、SSW が教師と対等な関係であるという認識をもつことが重要であると示されており、具体的にどのように対等関係を築いていくのかを探るために、第1章の第3節では、パワー関係に着目した構造的ソーシャルワーク理論について整理した。この理論の強調点は、クライアントとのトップダウンの専門家モデルではなく、クライアントとより協調的で対話的な平等な関係を求めること（Carleton University 2002；Fook 1993）であり、新しい相互作用のパターンが構造的な変化に結びついていくとされる。構造的なソーシャルワークに必要なのは実践であるが（Meekosha & Shuttleworth 2009）、家庭と学校が対話的で平等な関係を築くための具体的なアプローチに関する研究は見当たらなかった。

第2章では、調査デザインを説明している。「研究の目的」で問題提起したのは、困難事例を解決していくための SSW の有効な支援のあり方はどのようなものなのか明らかにするために、学校と家庭をつなぐための具体的な支援方法について検討することである。そして、対等で対話できる関係によって子どもの問題をどのように解決していくのかといった支援のあり方を明らかにすることである。調査プロセスは、9名の SSW に対して、「スクールソーシャルワーカーは家庭と学校をつなぐために、どのように動き、なぜそのように働きかけるのか」についてインタビュー調査を行った。調査により得られたデータを、MAXQDA11（Release11.11）を用いた佐藤（2008a・2008b）の質的データ分析法によって

分析した。

第3章の結果と考察では、インタビュー調査によるデータを、カテゴリー3、コード21に整理された。SSWへのインタビューデータをもとに、困難事例を解決していくためのSSWの有効な支援のあり方、さらに家庭と学校をつなぐための具体的な支援方法についてSSW本人が家庭と学校にアプローチする際に意識していることが明らかになった。【学校への関わり】では、《(権限を持つ)校長を押しやる》、《全体としての役割を把握する》、《味方を探す》、《味方に変える》、《課題を整理する》、《担当を分ける》の6点を示した。【家庭への関わり】では、《一番の味方と伝える》、《客観視できるような問いを投げる》、《主訴の視覚化》、《優先順位を整理する》、《仕分けする》、《できないことよりできそうなことを探る》、《小さな目標を一緒に立てる》の7点を示した。【学校と家庭への関わり】は、《SSWとしてできることをPRする》、《入り込む》、《両方の一員になる》、《エンカレッジする(労う)》、《通訳する》、《大げさに気持ちを代弁する》、《解決を焦点化する》、《同じ目標を共有する》の8点を示した。【学校への関わり】、【家庭への関わり】、【学校と家庭への関わり】の3つの上位概念と21の下位概念を示すことができた(図2)。



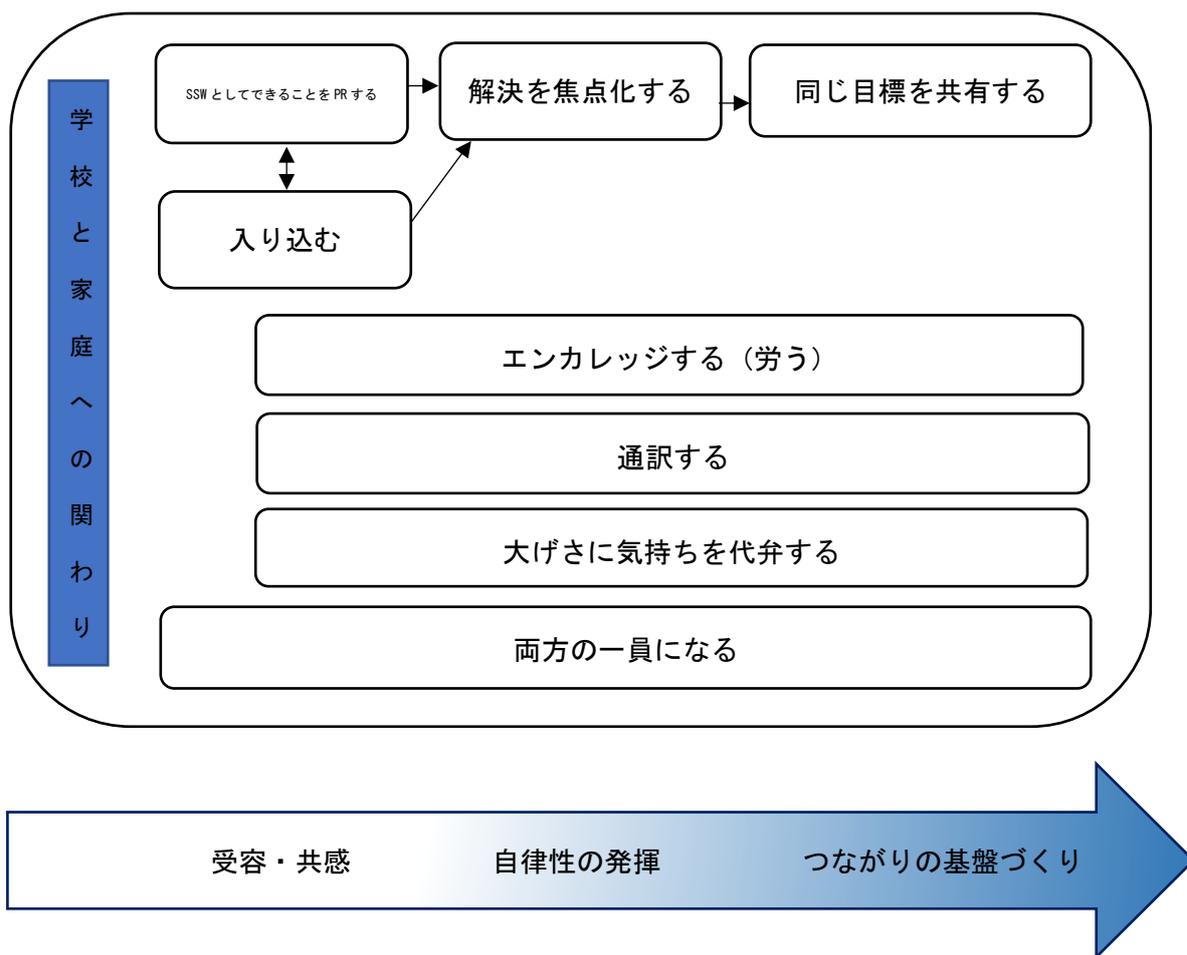


図2 学校と家庭をつなぐSSWの支援のプロセスモデル

筆者作成

困難事例においては、権力構造に常に意識を向け、学校と家庭、SSWが対等な関係になるように、SSW自身のことを開示しながら、家庭や学校との対話を重ねていった。抑圧を受けている家庭や学校に対して、まずは受容・共感し、尊厳を守りながら、自律性を発揮できるようエンパワメントを意識することでつながりの基盤が創出される。そこから、学校と家庭の強みをいち早く見つけ、強さに焦点を当て、力を出せるように子どもを支援するパートナーとして折り合いをつけながら一緒にゴールを組み立てていく。SSWは学校システムや家庭システムの構造をしっかりと構築させ、対話を通して苦難を価値づけそこから新たに機能していくように支援を行うことでシステムが変革し、悪循環から好循環のつながりに変換できるのではないだろうか。

第4章では、第3章のモデルの有効性を実証するために、筆者のスクールソーシャルワークの実践の中から、家庭と学校をつないだ事例を紹介した。主として困難事例に対する支援

経過を振り返り、SSW が家庭と学校に対してどのように調整を行っていったかについて、学校と家庭をつなぐ SSW の支援のプロセスモデルを活用し、具体的な支援の際のポイントを取り上げ、筆者のスクールソーシャルワーク実践から見えてくる支援のあり方について論じた。

第5章の結論では、3章及び4章の研究結果を踏まえて、本研究の意義と独自性について示し、研究の限界と今後の研究課題について言及した。

本研究の大きな意義としては、質的研究法を用いて現実のスクールソーシャルワーク実践から、困難事例を解決していくためのアプローチについて概念化を試み、有用である実践モデルを構築したことである。具体的には以下の2点を明らかにした。

第1は、SSW へのインタビューデータをもとに、困難事例を解決していくための SSW の有効な支援のあり方として、学校と家庭をつなぐための具体的な支援方法について明らかにした点である。具体的には、3つの上位概念と、21の下位概念を示すことができた(図3)。SSW による学校システムへの関わりと家庭システムへの関わりについては共通する部分が多く、それぞれの概念は、相互に影響し合いながら、学校と家庭をつないでいくことがわかった。学校と家族をつなぐプロセスの中で抑圧構造の全体理解として、構造的ソーシャルワーク理論をベースに全体を見立て、短期アプローチとして危機介入アプローチが用いられている。学校と家族の誰と誰の関係が危機的状況にあるか、さらに抑圧関係を特定し、学校や家族がパワーレスな状況であれば、まずはエンパワメント・アプローチ、ナラティブ・アプローチを用いて、対自化・自己決定ができるように受容・共感を行なう。そして、課題中心アプローチ、ソリューション・フォーカスト・アプローチなど様々なアプローチを活用し対処していくことが分かった。

これらの理論・アプローチ及び21の概念を用いることで、クライアントは受容・共感され、自律性を発揮し、連帯の基盤づくりがおこなわれる。これらのプロセスによって、子どもが変化していく。

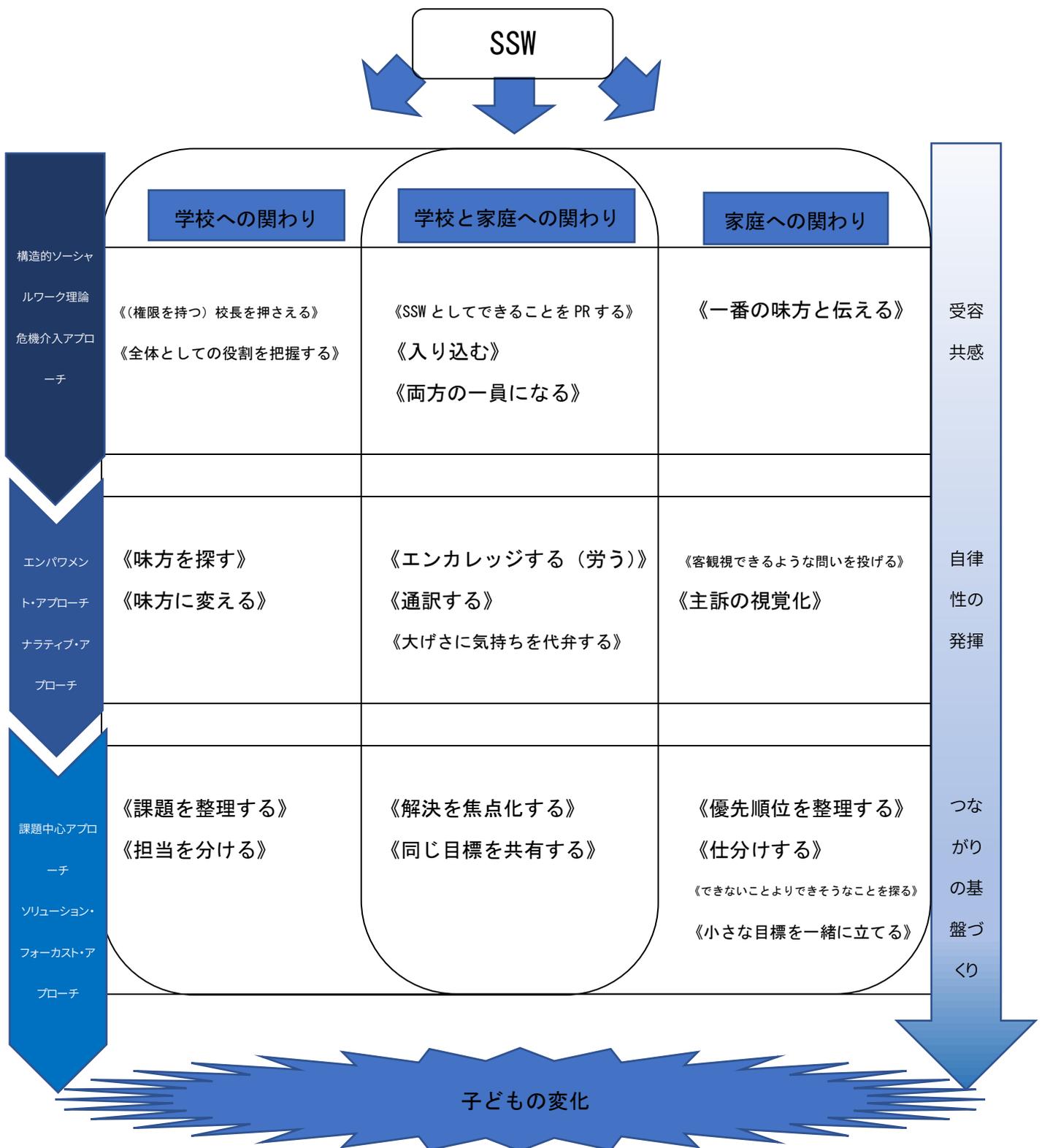


図3 学校と家庭をつなぐSSWの支援のモデル

筆者作成

第2は、対等で対話できる関係によって子どもの問題をどのように解決していくのかといった問題解決のプロセスとその支援のあり方を明らかにしたことである。第3章で示したモデル及び第4章の事例検討を通じて、以下の流れがあることを示した。対立関係にあった家庭と学校は、対話を通して、子どもに起こっている問題を意味づけ、意味を共有し、新たな意味・価値を一緒に創り上げていく。子どもの行動に対して、良し悪しを評価するのではなく、一つ一つの行動の意味を一緒に理解しながら、価値・意味を共有し、意味づけ、意味・価値を創っていくということである。SSWは自己開示しながら、まずは受容・共感し相手の意見を聴き尊重するといった対話的活動を通じて、クライアントに安心をもたらすであろう。そしてその安心がクライアントの自律につながり、つながりへの基盤づくりとなる。

本研究の限界と課題には、主に質的研究の課題、研究方法の課題、支援体制や制度・施策における体制整備における課題の3つを挙げている。今後の研究課題は、構造的なSSWの臨床実践にちりばめられている関係構築・促進に繋がる支援を明らかにし、積みあげることを通して、学校と家庭の関係構築・促進に向けた子どもを支援する人たちが連携するためのわかりやすいガイドラインを作成することが必要である。

本研究には限界ならびに課題が残されているが、構造的ソーシャルワーク理論を採用してSSW実践を展開することで、学校と家庭をつなぐ可能性が示されたことは、一定の意義があるものと考えている。今後さらに、SSW実践の充実を図るためにも、一般に活用できるチェックリスト(表1)を改良させ、SSWのスキル評価指標の検討を行い、本研究の結果をもとに教育の制度・政策にも関連させたマクロレベルの実践や研究の蓄積を行っていく必要があると考える。

表1 SSWが学校と家庭をつなぐためのチェックリスト

対象	概念名	チェック欄	内容
学校 への 関 わり	(権限を持つ) 校長を 押さえる	<input type="checkbox"/>	校長の考えや学校運営、SSWに求めること、他の教員との関係性やパワーバランスを構造的に把握する。
	全体としての役割を把握する	<input type="checkbox"/>	学校システム全体としてのSSWの役割を常に考える。
	味方を探す	<input type="checkbox"/>	子どもや保護者に対してストレングス視点を持っているか、その子のために何とかしたいという思いを持っているか、SSWに対して批判的な人でなく、協力してもらえそうな人か、SSWと同じ福祉的な視点、感覚に近い人であるか否かを把握する。
	味方に変える	<input type="checkbox"/>	子どもや家族の思いや背景を伝え、「なぜその行動をしているか」といった考えを一緒に共有・理解する。
	課題を整理する	<input type="checkbox"/>	情報を取り、まずは「先生たちが何に困っているのか」、「どうしたいのか」、「学校として抱えている課題は何なのか」、学校システムで課題を捉え、動きや流れを含めて整理していく。
	担当を分ける	<input type="checkbox"/>	担任など、役割が一人の教員に集中しがちなのを、他の教師に分散させるということである。
家庭 への 関 わり	一番の味方と伝える	<input type="checkbox"/>	孤立し、誰にも頼ることができない家族にとって「一番の味方です」という言葉かけをおこなう。
	客観視できるような問いを投げる	<input type="checkbox"/>	家族に対して、子ども自身がどう考えていると思われるかといった子ども視点に置き換えるような視点を広げる質問を積極的におこなう。
	主訴の視覚化	<input type="checkbox"/>	面接をしながら板書に書き出し、ニーズを可視化して整理していく。

	優先順位を整理する	<input type="checkbox"/>	今一番しんどいことを聴き、複雑化している問題・情報を一緒に整理する。
	仕分けする	<input type="checkbox"/>	学校でできることと他機関ができることを提示するために仕分けする。また、いじめや不登校など現象面だけでなく、子どもの発達特性など本質的な問題を分け、そこに切り込んでいく。
	できないことよりできそうなことを探る	<input type="checkbox"/>	解決するための答えが引き出せるような質問をおこなう。その質問は未来志向であり、気づきを促すものである。
	小さな目標を一緒に立てる	<input type="checkbox"/>	家族自身が自分で目標を立てることと同時に、SSWも自身の目標を立て、共に歩もうという姿勢である。
学校と家庭への関わり	SSWとしてできることをPRする	<input type="checkbox"/>	SSW自身を理解してもらえるように、何が学校や家族にとってのメリットであるかを伝える。
	入り込む	<input type="checkbox"/>	同じ行動を同じタイミングでおこなう、率直に聴くなど初回面接など早い段階において、入り込む。
	両方の一員になる	<input type="checkbox"/>	家庭・学校のそれぞれのペースに合わせ、学校と家族の一部になる。
	エンカレッジする（労う）	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>	<p>家族の力、学校の力、子どもの持つ力を信じ、それらを最大限に引き出し、高める関わりをおこなう。</p> <p>学校 教師がバーンアウトしないように他の教職員も巻き込みながら、労う。</p> <p>家庭 家族が大事にされている、尊重されていると感じることができるよう労う。</p>

通訳する	<input type="checkbox"/>	学校と家庭の関係が悪い際に翻訳や交渉したりする。保護者と学校それぞれから言い分を聴き、伝える内容を整理・確認しながら、相手に伝える。
大きさに気持ちを代弁する	<input type="checkbox"/>	それぞれの思いや気持ちを伝えるには、少し付け加える程度で両者に伝える。家庭や学校の思いや言葉の背景・意図のポジティブな面を切り取って伝えていく。
解決を焦点化する	<input type="checkbox"/>	ゴールがイメージできるような質問を投げかけ、よくなる見通し（完成図のイメージ）を伝える。
同じ目標を共有する	<input type="checkbox"/>	学校と家庭が同じ方向を向けるように目標を双方に伝えていき、足並みをそろえる。

筆者作成

文献

- ・ Carleton University (2002) General themes of structural social work. Retrieved from: <http://socialpolicy.ca/52100/m16/m16-t5.stm#5> goals of client empowerment and worker activism for social change.
- ・ Fook, J. (1993) Radical casework: A theory of practice. NSW, Australia: Allen & Unwin Pty Ltd.
- ・ Germain, C.B. 他, 小島蓉子編訳・著 (1992) 『エコロジカル・ソーシャルワーク : カレル・ジャーメイン名論文集』 学苑社.
- ・ 浜谷直人 (2006) 「小学校通級学級における巡回相談による軽度発達障害等の教育実践への支援モデル」 『教育心理学研究』 54, 395-407.
- ・ 石隈利紀・上村恵津子 (2002) 「IEP 作成プロセスにおける保護者の参加に関する研究の動向 : 過去 10 年間の米国の論文のレビューから」 『筑波大学心理学研究』 24, 245-254.
- ・ 岸田幸弘 (2009) 「不登校支援の在り方を探る ある同一事例の当事者, 母親, 担任教師の認識のずれ」 『学苑初等教育学科紀要』 824, 31-51.
- ・ Meekosha, H., & Shuttleworth, R. (2009) What's so 'critical' about Critical Disability Studies? *Australian Journal of Human Rights*, 15(1), 47-75.
- ・ 大塚美和子 (2011) 「子どもの貧困とスクールソーシャルワーカー 子どもと家庭への新しい支援システムの必要性 (特集 子どもと家庭へのソーシャルワーク)」 『ソーシャルワーク学会誌』 21, 15-26.

- ・ 佐藤郁哉 (2008a) 『質的データ分析法：原理・方法・実践』新曜社.
- ・ 佐藤郁哉 (2008b) 『実践 質的データ分析入門』新曜社.
- ・ 瀬戸美奈子 (2013) 「子どもの援助に関する教師と保護者との連携における課題」『三重大学教育学部研究紀要』64,233-237.
- ・ 内田利広・海老瀬正純 (1999) 「カウンセリングを活用した学校教育相談のあり方について（その1）－学校教育相談校内体制の現状調査を通して－」『京都教育大学教育実践研究年報』15,257-274.